



JAPANESE LANGUAGE EDUCATION METHODS

第46回 日本語教育方法研究会 国際交流基金日本語国際センター（埼玉県さいたま市） 2016年3月19日（土）

3月19日に国際交流基金日本語国際センターで2015年度第3回となる第46回研究会を開催いたします。今回も夜の懇親会の代わりに昼食交流会を企画しました。会場で昼食をとりながら、自由に楽しく意見交換をしていただければと思います。是非とも多数の方々にご参加いただけますよう、ご案内申し上げます。

会長 衣川隆生

TABLE 1 第46回研究会開催について

日時：	2016年3月19日（土）
会場：	国際交流基金日本語国際センター
開催委員：	久保田美子（国際交流基金日本語国際センター） 小河原義朗（事務局：北海道大学）

TABLE 2 開催スケジュール

午前		午後	
9:15	受付（発表者・一般） ポスター貼付	1:45	昼食交流会終了
10:00	開会の挨拶	2:00	今後の研究会の体制の説明
10:05	会の進め方の説明	2:10	口頭発表開始
10:10	口頭発表開始	3:10	ポスターセッション開始
11:10	ポスターセッション開始	4:40	ポスターセッション終了
12:40	ポスターセッション終了 午後のポスター貼付	5:00	講評・JLEM賞発表 次回開催委員挨拶 閉会の挨拶
12:45	昼食交流会開始		参加者全員で片付け

【参加方法】

事前申し込みは必要ありません。直接会場においでください。非会員の方でも、会場で手続きをして参加することができます。当日のみ参加の方は当日受付にてお申し込みください。参加費は当日受付にてお支払いください。皆様、お誘い合わせの上、ご参加ください。なお、会場での現金の授受はできるだけ避けたいと思いますので、会員の方、会員になるご予約の方は、事前の会費納入（p.13参照）にご協力ください。

新規入会：3,000円（年会費）

当日のみ参加：2,000円（非会員）

【プログラム】

【午前の部】

●口頭発表（5件）

1. 日本語学習教材における情報デザインー日本語学習者対象の意識調査を中心にー

高嶋幸太（立教大学）・桐山岳寛（桐山岳寛グラフィックデザイン室）

日本語学習者 111 名を対象に、彼らが理解促進のためにどのような学習教材の情報デザインを望んでいるのかを明らかにするため、評価尺度による意識調査を行った。その結果、文字を強調するインプット強化手法では「下線」が、イラストでは「絵」より「写真」が統計的にも望まれているということが明らかになった。他にも「文法に関する説明」「正用」「誤用」「アイコン・ピクトグラム」「言語形式のひな型」「表」「学習項目のまとめ」「学習項目の番号づけ」「キャプション」なども理解の助けになると考えられていることが確認された。これらの結果を踏まえ、試案として日本語学習教材におけるモデルデザインを提示する。

2. 職業目的の日本語教育における学習内容の優先順序決定方法ーフライトアテンダントとホテルスタッフを例にー

赤城永里子（大阪経済法科大学）

本発表では、すでに職につき、日本語での業務の遂行を目的とする学習者を対象とした職業目的のための日本語教育のシラバスデザインの一方法を提案する。これらの学習者は一般的に学習時間・期間が限定され、効率的な教育が求められる。必要なスキルの学習が優先され、学習者に必要な語彙や文法が、その難度に関係なく教育される。また、学習者が実際の現場で必要になる項目から優先的に指導していく必要があり、業務自体を学習順序の基準に入れる必要がある。1つの職業では様々な業務が行われているが、特に優先すべきものは何か、どのように優先順序を付けるべきかを、客室乗務員、ホテルスタッフのニーズ調査の結果に基づいて提案する。

3. 中級の漢字語彙学習を目指した授業の実践報告

平山允子（日本学生支援機構東京日本語教育センター）

漢字語彙を学習することは、日本の高等教育機関への進学を志す留学生にとって重要なことである。しかし、多くの場合、その学習は彼らにとって学習負担の非常に重いものになっている。この学習負担を軽減し、学習効果を高めるために、漢字語彙の学習を小さなステップに分けて行う授業を実践した。各授業は、学習目標語の予習、語彙練習、漢字の読み・書き、漢字語彙の復習、小テストのステップに分けられた。学期末の授業アンケートで、本実践に対して学生たちから高い評価が得られた。また、本実践を通して、現在の教科書の問題点が明らかになり、教科書改訂に向けて具体的な示唆が得られた。

4. 留学生はいかにパーソナル・テリトリーに踏み込むのかー初対面の日本語学習者と母語話者の会話に見られる発話の分析を通してー

許明子（筑波大学）・永井絢子・井上里鶴・小川恭平（筑波大学大学院生）

本研究の目的は、聞き手のパーソナル・テリトリー（個人の固有領域）に、日本語学習者と母語話者がどのように踏み込むのかを明らかにすることである。初対面の韓国人・中国人日本語学習者と日本語母語話者による意見交換の会話（韓日6ペア、中日6ペア、韓中6ペア）を分析データとし、パーソナル・テリトリーへの踏み込みが見られた発話を抽出した。パーソナル・テリトリーへの言及内容およびその後の発話展開を分析した結果、学習者と日本語母語話者間には言及方法に明らかな違いが見られた。発表では、学習者の過度なパーソナル・テリトリーへの踏み込みによる唐突な話題転換の例や、日本語母語話者の応答回避の会話例を紹介し、議論する。

5. 看護を学ぶ日本語母語話者への「やさしい日本語」教育の試み

世良時子（成蹊大学）・根本愛子（国際基督教大学）

看護専門学校で学ぶ日本語母語話者の学生を対象とし、「やさしい日本語」のワークショップを行った。患者としての外国人のみならず外国人看護師等の増加に伴い、医療現場はより多様化しており、看護師にはそれに対応できるコミュニケーション能力が求められている。「やさしい日本語」の導入は、このような状況への理解の促進を目的としている。ワークショップでは、外国人ゲストを患者役として、タスク先行型のグループワークを

行った。また、外国人ゲストの体験談を聞き、交流する時間も設けた。普段外国人との接触場面を持たない看護学生たちにとって、他者への気づきを促し、新しいコミュニケーションの発想を得る機会になったと考えられる。

●ポスター発表（上記5件を含む23件）

6. 中級「やりとり」科目の実践報告－アウトカム重視型のコースデザイン－

鄭惠先・須藤むつ子・今泉智子・水谷圭子（北海道大学）

本発表は、日本語カリキュラムの改編にともない新たに開講された「やりとり」モードの科目群における、アウトカム重視型学習(Outcome-based Learning)の設計と成果について報告するものである。新カリキュラムは全体として「やりとり」「表現」「理解」の3つのモードで構成されており、到達目標の中には「PBLを基軸とする交流型授業において留学生が日本人学生と対等な立場で協働活動できる」と示されている。本発表では、科目・レベルごとに設定された行動目標・スキル・アウトカムの達成のために、2015年度の中級「やりとり」科目において実際に行った教室活動の内容と課題について実践報告を行う。

7. 説明文の母語翻訳課題から見た対面聴解と非対面聴解の違い

呉佳穎（首都大学東京大学院生）

本調査の目的は、対面聴解と非対面聴解の違いを、日本語の説明文の母語翻訳課題を通し明らかにすることである。N2台湾人学習者9名を、映像／対面聴解群5名と音声／非対面聴解群4名に分け、炭素の説明を視聴させ、口頭の母語翻訳課題を課した。参加者の翻訳内容を文字化し、分析した結果、内容の大枠及び詳細情報の理解において、両群の間に5つの違いが見られた。この結果から、対面聴解では内容をより大きな視点から推測、解釈するのに対し、非対面聴解では狭い範囲で情報を関連付けたり、逐語訳のように解釈してしまう可能性が示唆された。また、映像群には視覚情報に起因しうる語彙の間違いが見られ、視覚情報が語彙の認知にも影響を与えると推測された。

8. ろう児の日本語教材の開発と課題－『ハルミブック』手話版・日本語版を例に－

長谷部倫子・佐々木倫子（明晴学園）

本発表のテーマは聴覚に障害を持つ子ども（以下、ろう児）の言語習得である。これまでのろう教育は、ろう児に聴覚を活用し日本語を第一言語として習得させることを目標としてきた。しかし音声入力のないろう児にとって音声言語の日本語を習得することは難しく、ろう児の日本語習得は長い間大きな課題であり続けた。2008年に開校した明晴学園では日本手話と日本語によるバイリンガルろう教育が開始された。本発表では新たなろう教育のために開発された手話と日本語の2言語教材『ハルミブック』の開発の経緯や教材の特色、また授業実践を通して明らかになった課題や改善について検証する。

9. 生教材としてのドキュメンタリー番組の分析及び授業提案－ニュース番組との比較から－

志賀玲子（一橋大学）

学習者の多様化及び学習現場での真正性が叫ばれている昨今、生教材の適宜使用は重要度を増しているだろう。筆者は大学院MBAコースにて、ドキュメンタリー番組を使って視聴覚授業を行った。学習者の専攻や興味に合致する番組使用は、日本の現状を伝えると共に学習者の意欲を引き出すのに役立った。この方法が日本語教育的観点から見て適当なのか否か、又より多くの対象者にとっても有効なのか否かを判断すべく、ドキュメンタリー番組で使用されている文について、ニュース番組との比較により、長さ・複雑さを分析した。結果、ニュース番組と比較して、ドキュメンタリー番組では、短く、より単純な構造の文が多く使用されていることがわかった。

10. 連想法を用いたひらがな・カタカナ学習サイトの作成

岩本穰志（立命館アジア太平洋大学）

立命館アジア太平洋大学は多くのゼロ初級の学習者を抱えるが、最初の段階であるひらがな、カタカナの学習に躓き、授業についていけない学習者が多々見られる。彼らが来日してから授業が始まるまでは非常に短期間であり、来日前に効率的に文字学習ができる自習教材が必要となっていた。そこで、イメージを介在させることで記憶を促進するIS連想法に着目し、オリジナルのイラストを用い、パソコン、スマートフォンの双方で使用可能なひらがな・カタカナ学習サイトを作成した。また、使用した学習者を対象にアンケートを行った結果、多く

の学習者が、楽しく効率的に文字を学習できたと高く評価していた。

11. 留学生対象の演劇クラスにおける日本語剰余的表現の学習—気持ち伝えるために—

中川千恵子・中山由佳（早稲田大学）

声を出して表現する行為の目的は、情報だけでなく、気持ちや状況を伝えることも含まれる。本発表では、そうした目的に注目した日本語学習・指導について報告する。本発表の対象となる日本語科目「演劇プロジェクト」では、留学生自身による台本作成、キャスト・スタッフとして上演会を実施する総合的な活動を行っている。ここでは、自然な日本語を使って自然な話し方をすることが重要になる。そのためには、情報を伝えるための基本的な発音練習等の他に、気持ちや状況を伝える剰余的表現の学習や練習が必要である。剰余的表現とは、教科書のメイン学習項目から外れているような、オノマトペ、感動詞、相槌、様々な口調、パラ言語情報等を指す。

12. 語彙導入のための映像教材開発—初級レベル編—

井上正子（首都大学東京）・水谷梢太（首都大学東京大学院生）・栄瑋（首都大学東京大学院修了生）・丁美貞（首都大学東京大学院生）

従来、語彙導入には主に絵カードや媒介語による翻訳本などが用いられてきた。昨今、ウェブサイトが閲覧可能な携帯端末の普及により動画サイトへのアクセスも容易になった。従って、動画を用いた動詞などの語彙学習支援ツールは教室内外を問わず活用範囲が広いと思われる。学習者が動詞や動作を表す文型などの運用能力を高めるためには、語彙の汎用性を知ることが重要な鍵といえる。そこで本研究は、超級レベルの学習者でも習得が難しい自他動詞をはじめ、動詞の理解を深めるために1語につき最大で5つの場面(動画)、同時に発音練習もできるようにそれぞれの語彙の音声を収録したオンライン語彙学習支援ツールの開発を目指す。

13. 多文化共生を目指した留学生・日本人学生によるグループ活動の実践—タスク達成プロセスの相互行為からみる多文化共生—

山田明子（九州大学）

現在、多文化共生社会の担い手育成を目指し、大学における留学生・日本人学生による意見交換型タスクを用いたグループ活動の実践を行っている。本研究の目的は、そのタスク達成の話し合いについて会話分析を行い、タスク達成プロセスにおける留学生・日本人学生の相互行為を明らかにすることである。分析の視点としては、タスク達成の話し合いにおいて、どのグループにも現れていた「他者発話のくりかえし」に着目し、ターンテイキング組織・連鎖組織をもとに分析を行った。発表では、タスクを用いたグループ活動の実践および相互行為の分析結果について報告するとともに、タスク達成プロセスにおいて多文化共生を阻むものについて述べる。

14. ビデオ教材を用いた音声指導の実践—ダイアグラムを視覚的補助として—

吉田千寿子（岐阜聖徳学園大学）

日本語学習者が一般に苦手とする、特殊拍を含む音節の長さの実現には、語の長さの配置を知り、適切な長さで発音することが求められる。そこで、語の長さの配置特徴であるリズム型について導入し、生成練習するための「歌教材ビデオ」や「ドリルビデオ」を制作した。これらのビデオではリズム型が四角形のダイアグラムとして表示され、音声とともに画面上に現れる。さらに、高さの配置を加えたビデオ教材を同様に制作して練習したところ、リズム型だけでなくアクセント型も意識して発音できるようになった。歌には語の記憶を促す効果があることが検証されており、ビデオという色鮮やかな視覚刺激によって記憶が更に促進したものと思われた。

15. 漢字を楽しむアニメーション動画制作の試み

伊藤秀明・石井容子・前田純子（国際交流基金関西国際センター）・山下万吉（岡山県立大学）

本発表では、学習者が持つ「漢字は難しい」という意識を軽減させ、「漢字を楽しむ」ことを目的として制作した漢字アニメーション動画について報告する。漢字の成り立ちや意味をイラスト化した教材は複数あり、それらは漢字を覚えることを目的として作られている。しかし、海外で具体的な目的を持たずに学習をしているような学習者は漢字に興味はあっても必ずしも覚えることを必要としない場合がある。そこで、そのような学習者が単純に漢字を楽しみ、漢字を学びたくなるようなものが作れないかという視点で漢字アニメーション制作を試みた。発表では試作品を実際に見せながら制作の意図、工夫、今後の課題などについて紹介する。

16. 新聞記事における慣用表現の出現頻度の調査

北村達也（甲南大学）・川村よし子（東京国際大学）

日本語の文章において高頻度に用いられる慣用表現を明らかにするため、新聞記事を対象にして慣用表現の利用状況を調査した。本研究では森田良行著『日本語の慣用表現辞典』（東京堂出版、2010）に掲載されている約2800の慣用表現を対象とした。新聞記事のデータは2014年の読売新聞のものを用いた。このデータには約290万文が含まれる。これにより、慣用表現は新聞記事にどの程度の割合で現れているかを調査するとともに、利用頻度が高い表現にはどのようなものがあるかを明らかにする。本研究で得られた結果は、学習者に対して、効率的に慣用表現を教えるための基礎データとなる。

17. 日本語ゼロビギナーのための動画教材 Lesson for Useful Expression in Japanese の開発

倉品さやか・竹内明弘（国際大学）・松田由美子（新潟大学）

本発表では、日本語ゼロビギナーを対象に日本語の表現を紹介・練習する目的で作成した動画教材を紹介する。本学は完全英語公用語環境であるため、空港から大学に至るまでに日本語が話せず困難を感じる学生も多く、また在学中に日本語コースを全く履修しない学生もいる。そこで、学生が日本での生活でよく出会うと思われる日本語使用場面を選び、そこで使用される表現を練習する動画を作成した。1回約5分の映像であり、現在、10回分をYouTubeで公開している。1話完結であるが、主人公を統一し、10話で1シリーズとなるストーリーにした。各回には場面と表現練習のほか、関連する語彙や文化紹介なども加えた。

18. NIE 授業の学習者自己評価について

富並美希（中央工学校）

本研究では専門学校の留学生に1年間NIE授業を行い、授業のまとめとして行った新聞作成に関して学習者に自己評価を行った。その結果、それぞれの項目とも最も基本的な項目の評価が高かった。1年間でできたことは、内容・表記・発表でもすべて基礎項目であったと言えるだろう。NIEという全く新しい授業に取り組んだため、学習者にとってはすべてが新しい学びであったため何度も繰り返し行った内容の自己評価が高くなったのであろう。他の項目で一度しか授業で取り上げなかったものは自己評価も低かった。自己評価を行ったことで学習者自身の授業の達成度が項目別に明らかになった。

19. 書き言葉の適切な運用を目指してーより実践的な練習問題作成の試みー

中林律子（東京福祉大学）・山本裕子・本間妙（中部大学）

筆者らは、日本人大学生及び留学生を対象に、論理的な文章を書けるようになることを目標とした教材開発を試みている。教材では内容面の組み立ての練習に加え、段階的に形式面の練習も組み込んでいる。形式面の練習は、これまで収集した論述文に頻繁に表れる誤りや、誤りを指摘しても理解しにくいものを練習問題として取り入れた。実際に実施したところ、話し言葉の使用やねじれ文等、一文レベルの練習では概ね修正ができるものの、文章中からこれらの誤りを探した上で修正する練習では修正が困難な傾向が見られ、自分で文章中から誤りを見つけ、修正する練習が必要であることなどが示唆された。この練習後、学生の論述文の形式面の評価点にも向上が見られた。

20. 「所属感」を高めるクラスづくりー初級日本語クラスにおけるアドラー心理学の応用ー

元田静・葛西里奈・小林尚美（東海大学）

所属感とは、自分はクラスの一員であるという気持ち、クラスに自分の居場所があるという感覚のことである。発表者らは、クラスへの所属感が高ければ、学習者は安心して日本語を学ぶことができるのではないかと考え、初級日本語クラスにおいて所属感を高めるクラスづくりに取り組んだ。実施に際しては、アドラー心理学を応用した。具体的には、1) クラス会議、2) 日本語成長記録ノート、3) まとめテストのペアチェックなどを行った。最後に、学習者にアンケートおよびインタビューを行い、今回の実践の効果と今後の課題を探った。結果から、今回の実践を行うことによって、学習者のクラスへの所属感が高まる可能性が示された。

21. 日本語のバリエーションを中心とした授業の実践報告ー中級前期の学部レベルの短期留学生を対象にー
石田麻実 (筑波大学)

本稿では日本語のバリエーションを中心とした授業の実践報告をする。目的は、文法を中心としたレベルとは異なる視点で学習者に日本語に触れてもらうこと、そして、対象者が短期留学生のため文化的な要素を取り入れることである。授業は主に方言を中心に、男女・世代間によることばの違い、役割語などを扱い、学習者が調査する活動も多く行った。終了後のアンケート・インタビューから、学習者は授業が日常生活で役に立ったと考えており、自身の日本語が広がったと感じていることがわかった。また、既存の文法シラバスでは測れないコミュニケーション力や知的関心が学習者の日本語学習を促進させていることが考察された。

22. 大学院で日本語教育学を学んだ元留学生のキャリア形成ー日本語教育分野以外の仕事をしている2名を例にー

中井陽子 (東京外国語大学)

日本の大学院で日本語教育学について専門的に学んだ留学生が多く輩出しているが、その中には、日本国内外の日本語教育現場で教育者・研究者として活躍している者がいる一方、日本語教育以外の職場で活躍する者もいる。本発表では、大学院で日本語教育学を学んだ後に、日本国内に留まり日本語教育現場以外の職場で活躍する元留学生2名へのインタビュー調査を行った結果をもとに、大学・大学院で学んだことを如何に自身のキャリア形成で活かしているか分析する。また、日本の職場で働くにあたって困難を感じる点についても見る。これにより、日本語教育の知見がいかにグローバル人材の育成に貢献できるか、そのヒントについて考察する。

23. ペアワークを中心とした会話練習におけるインターアクション観察 (4) ーペアワークで学習者はパートナーをどうアシストしているかー

中原なおみ・河内彩香・藤田朋世・増田真理子 (東京大学)

本発表では、ペアで会話を作成する教室活動の学習者間インターアクションの観察を通して、具体的な学習者の学びの様子を報告する (データは、初級クラス 100 分×9 回分の録音記録を使用)。中原他 (2013) では、教室の構成員全体によるダイナミックなインターアクションの展開について報告したが、今回は、教室内で他の複数の学習者から「好ましいパートナー」と見られていた学習者個人に焦点を当て、当該学習者が、パートナーに対して各局面でどのようなアシストを行っていたかを、Ohta (2001) の枠組みを利用して分析した。その結果、パートナーのレベルや状況に応じて、適切にアシストの方法を変化させたり、会話のトピック変更を様々な方法で促して活動を活性化させたりする様子が観察された。発表では、これらにつき詳細に報告する。

【午後の部】

●口頭発表 (5 件)

24. 教師が考える「うまくいった」、「うまくいかなかった」ピア・レスポンスとはー教師へのアンケート調査からー

藤田百子 (早稲田大学)・柴田幸子 (大東文化大学)・伊藤奈津美・ドイル綾子・石川早苗 (早稲田大学)

本研究では、ピアレスポンスの成否を、教師は何によって判断しているかを調査し、その要因を明らかにした。その結果、教師が「うまくいった」と判断する場合、プロダクトや活動の様子など可視化された状況を挙げ、「うまくいかなかった」と判断する場合は学習者の属性や能力など可視化されない要素に原因を求める傾向があることが分かった。しかし、活動全体の流れの中で可視化可能な要素は一部に過ぎず、学習者の能力も一部の限られた状況での判断でしかない。そこで活動のプロセスにおいて、教師がどのような「足場かけ」を行うことがより効果的な活動につながるかを考察した。

25. 「映画で学ぶ日本語」コースにおける取り組みー自律的学習能力の育成を目指してー

相場いぶき (ディキンソン大学)

インターネット上でいつでもどこでも日本のポップカルチャーに触れることができる現在、教室外で学習者がそれを用いて自律的に日本語を学ぶ力を養うことは、今後ますます重要視されるであろう。本研究は、「学習者が自分で自分の学習の理由あるいは目的と内容、方法に関して選択を行い、その選択に基づいた計画を実行し、結果を評価する」(青木 2005) という自律学習の定義に基づいて筆者が行った「映画で学ぶ日本語」コースの実

実践報告とその考察である。7 週間のコース終了後のアンケートから、学習者は映画から何をどのように学ぶことができるかを知り、また自らそれを実践・報告することで、今後の自律学習への自信を深めたことがわかった。

26. 相互理解のためのやりとり能力育成を目指した授業実践―聞き手の働きかけに着目した試み―

押尾和美・長坂水晶（国際交流基金日本語国際センター）

口頭運用力獲得を目指す授業において、相互理解を目指すやりとりでの聞き手の働きかけに着目した実践を行った。この実践では、JF 日本語教育スタンダードで設定する B2 レベル（熟達した使用者）を目指す学習者を対象とした。結論を導き出すための議論や交渉といった、実際的な課題を解決するためのやりとりではなく、相手の信念や価値観を理解するためのやりとりを扱い、会話の深まりに大きな影響を与える聞き手の役割や行動に着目する。相手を受け止め理解しようとする聞き手のあり方について学習者自身がどのような気づきを得て、自身の日本語使用にどのような影響を受けるかを観察した結果を報告する。

27. 協働を取り入れた口頭発表指導の可能性

船橋瑞貴（群馬大学）

上級レベル（N1 合格あるいは相当レベル）に至るまで、スピーチやプレゼンテーションといった複数の聞き手を前にした口頭発表活動の指導を受けたことがない日本語学習者を対象とし、自身の専門についてのショートプレゼンテーションをしてもらい、録画した。自身の発表映像を視聴しながらの振り返りを行った上で、聞き手として参加したクラスメイトによるコメントと教師による口頭発表活動の例示を段階的に与えた。発表者がこれらのコメントや例示をどのように捉え、どのような気づきを得て改善へとつなげるかを把握し、活動の意義を検討した。

28. 身体部位を表す方言語彙の表示システム

山本悠人（甲南大学学部生）・北村達也（甲南大学）・岩城裕之（高知大学）・今村かほる（弘前学院大学）

EPA による外国人看護師や介護福祉士（非日本語母語話者）が日本語母語話者の看護、介護に従事する場合、身体部位や身体症状を言い表す方言語彙の理解が難しく、コミュニケーションにおけるハードルとなっている。そこで本研究では、PC、タブレット上で簡単に身体部位を表す方言語彙を知ることができるシステムを開発した。本システムでは、画面上部のプルダウンメニューにより地域を選択することができる。画面上には全身および顔面のイラストも表示されており、各部位をマウスでクリックまたは指でタップすると、対応する方言語彙がポップアップされる。本システムは看護、介護する側が方言を理解できない日本語母語話者にも有効である。

●ポスター発表（上記 5 件を含む 24 件）

29. 自らと日本語との関係の捉え直し―ポートフォリオ活動をとおして―

黒田史彦（首都大学東京）・山内薫（早稲田大学大学院生）

留学生向けに「ポートフォリオを使って日本語学習を考える」という日本語クラスを開講した。ポートフォリオには、学習目標の設定、学習の記録、振り返りを促す仕掛けが盛り込まれている。クラス活動の一環として、ポートフォリオへの書き込み内容を軸に、学習にまつわる幅広い話題について意見交換を行った。本研究では、受講者の一人に焦点を当て、ポートフォリオ、期末レポート、アンケートへの記述内容、インタビューへの回答を分析対象とした。その結果、学習行動や学習意識の変容過程と変容結果、更には、自らと日本語との関係をどのように捉え直すに至ったのか明らかになった。結果として、ポートフォリオ利活用の有効性が裏付けられた。

30. 日本語教育におけるインクルーシブ教育の実現に向けた一授業の提案―点字五十音図を素材として―

河住有希子（日本工業大学）・浅野有里（日本国際教育支援協会）・藤田恵（立教大学）・北川幸子（京都外国語大学）・秋元美晴（恵泉女学園大学）

日本語教育におけるインクルーシブ教育の実現に向けて、視覚障害への理解を深め、共に学ぶための視点を養うことを目的とした授業案について述べる。発表者らは 2015 年に、視覚障害学習者への文字導入教材として点字五十音図を作成した。点訳された日本語教材にはいずれも五十音図が添付されていないため、この点字五十音図は導入期の学習に役立つものとする。さらに本発表では、点字五十音図を視覚障害学習者の文字学習教材に留めず、晴眼の教師および学習者が視覚障害者を取り巻く社会環境について学ぶ学習コンテンツとしての活用法

を提案する。これにより、多様な他者への理解が深まり、共に学ぶための土壌が作られることが期待される。

31. ウェブ教材を利用してもらうための環境づくりー『介護の漢字サポーター』『介護のことばサーチ』の実例を基にー

中川健司（横浜国立大学）・角南北斗（フリーランス）・齊藤真美（アルバータ州教育省）・布尾勝一郎（佐賀大学）・橋本洋輔（国際教養大学）・野村愛（首都大学東京）

発表者はこれまでに、介護福祉士候補者向けの学習ウェブサイト「介護の漢字サポーター」「介護のことばサーチ」を開発、公開してきたが、ウェブ教材は開発してそれで終わりということではなく、学習者に使ってもらうための環境整備を継続的に行うことが重要である。本発表では、発表者がこれまでに行ってきたウェブ教材の環境整備について 1)その存在を知ってもらうための活動（周知活動）、2)使い方を知ってもらうための工夫、3)コンテンツの内容の改善等の観点から論じる。当日の発表では、ウェブ教材の活用のためには何が必要なのかについても参加者と議論したいと考えている。

32. ニュース視聴を活用した上級読解

澁谷きみ子（同志社大学）

上級日本語学習者はさまざまな日本の時事問題に関心があり、読解の授業でも多様なトピックを扱っている。しかしながら、学習者の専門や関心は幅広く、トピックに関する周辺知識なしに読解内容を素早く把握することが困難な場合もある。そこで、ニュース視聴を読解の pre-reading として活用することにした。単にニュースを聞く（見る）というのではなく、読解教材に関連した内容を取り入れることで、トピックに関する周辺知識を得ることができ、読みを深めることができると考える。本研究では、ニュース視聴を活用した新聞読解の授業の実践について、新聞記事とニュースの内容に焦点を当て考察した。

33. 「次が読みたくなる」初級読解教材の要素

渡辺民江・上田美紀（中部大学）

発表者は、日本語学習の一助となり、且つ、楽しみのための『読み』となる初級読解教材を開発してきた。本研究では、試用結果を基に教材を改訂し、使用及び評価を行った。改訂にあたっては、より読み手の「次が読みたくなる」欲求を喚起することを意識し、・読み手が他者と出会う・言語理解を通して読み手が新しい経験をする・読み手が読み物の参加者になる・読み手の感情の動きを促す、といった内容と課題を取り入れた。評価結果から、本教材の改訂目的は、概ね達成されていることがわかった。また、感想を分析することにより「次が読みたくなる」教材に求められる要素は何かを導き出すことにつながった。

34. 日本語口頭表現クラスにおけるアサーション・トレーニングの実践

川崎一喜（立命館大学）

本発表は、口頭表現クラスにおけるアサーション・トレーニングの実践報告である。人が社会的な生活を営むためのコミュニケーションスキルの一つに、「アサーティブネス」がある。筆者は、大学 1 年生の留学生を対象に、アサーティブなコミュニケーションとはどのようなものか、ロールプレイを通して考える、という授業を行った。その結果、アサーションの場面においては、相手の気持ちにも配慮することが大切である、という気づきが得られた一方、自分の気持ちをうまく相手に伝えることに難しさを感じている者も少なからずいることがわかった。

35. 初級から中級にかけて伸びが見られた非漢字圏学習者の漢字学習ストラテジー

佐藤曜子（マレーシア工科大学）・笠原(竹田)ゆう子（電気通信大学）

漢字習得は、非漢字圏の日本語学習者にとって困難な学習の一つである。特に、字数が増え字形も複雑になる中級初期に困難を感じる学習者が多い。しかし、初級から中級にかけての時期に、成績を伸ばす学習者もいる。彼らが使用している漢字学習方法にはどのような特徴があるのか。非漢字圏であるマレーシアの予備教育機関で学ぶ 170 名の学習者を対象に実施した「漢字学習ストラテジー使用調査」の結果から考察し、今後の漢字指導の改善に活かすことを目的とする。

36. 学習者の特殊拍の捉え方ー身体運動と指導後の評価の伸びー

中村則子（東京外国語大学）・木下直子（早稲田大学）・柳澤絵美（明治大学）

本研究の目的は、身体運動を用いた特殊拍の発音指導による音声評価の伸びと、指導に用いた体の動かし方との関係をインタビュー調査の分析から明らかにすることである。調査協力者は日本語学校に通う中級学習者 35 名で、自身が考案した身体運動を用いて、1 時間×2 回の個人指導を受けた。リズムの刻み方（モーラか音節か）、特殊拍の種類により動きを変えるかどうかなど、学習者の捉える特殊拍の動きは様々であった。指導後の評価は指導前より有意に向上していたが、特に注目すべきは、伸び率が高い学習者にはモーラ単位でリズムを刻む傾向が観察された点である。また、身体運動に対する好みは必ずしも評価結果と一致していなかった。

37. ソーシャルワーカーに対する「やさしい日本語」普及の試み

根本愛子（国際基督教大学）・世良時子（成蹊大学）

在住外国人の増加に伴い、医療福祉分野においても日本語を母語としない人々への支援の増加も予測されている。そこで、栃木県内の医療福祉機関や精神保健分野で活動しているソーシャルワーカーを対象に、「やさしい日本語」への理解を促すための講座を行った。内容は、栃木県内の外国人の状況および「やさしい日本語」とは何か、そして、その必要性等に関する講義、在住外国人をゲストとしたグループワークである。参加者からは、コミュニケーションのポイントがわかったこと、当事者の声を直接聞くことができたことが、実際の業務に大変参考になるとの評価が得られた。

38. 実社会につながる選択授業ービジネスマナークラスの実践報告ー

林田なぎ（早稲田文化館日本語科）・井上里鶴（筑波大学大学院生）

本発表は、日本語学校における選択授業の一つとして行ったビジネスマナークラスの実践を報告する。各学期約 3 ヶ月の完結クラス（1 回約 90 分、全 6 回）であり、2015 年度の受講者はリピーター 4 名を含む 89 名であった。クラス設計では、ビジネスシーンの疑似体験および敬語を徹底的に使用することを念頭に置いた。発表では、実践全体の詳細とともに、受講中の学生の様子を報告する。また、本クラスを受講後に就職した学生に対するインタビューを行い、本クラスで学んだことで実際に役立つ内容および今後の授業改善につながる有益な示唆を得た。

39. 日本語中上級文法クラスにおける反転授業の試み

中溝朋子（山口大学）

中上級日本語学習者を対象とした文法の授業において実施した反転授業の試みについて報告する。本授業では完全習得学習型の授業を目指し、Moodle を用いて事前に授業で扱う文法項目の説明（PowerPoint によるビデオ）およびその理解度と視聴を確認するための宿題、選択式練習問題を配信し、授業では小グループで当日配布するプリントの練習問題の回答・答え合わせを行い、最後に簡単なチェック問題と振り返り（記述式）を行った。発表では、学習者の学習状況、授業後の振り返り、アンケート調査の結果を基に日本語授業における反転授業の効果と課題について考察する。

40. 伝統芸能をテーマとする日本語授業のデザイン

高井美穂（摂南大学）

伝統芸能の鑑賞を「体験」と位置づけ、1)資料読解による基礎知識の獲得、2)1)の発表、3)DVD 等による演目鑑賞、4)鑑賞レポートの作成、5)受講者同士によるレポートの相互評価、6)フィードバック、のサイクルで構成した日本語科目をデザイン、実施した。受講者間の相互評価でレポートの点数が最も伸びた学習者の提出したミニッツ・ペーパーを分析した結果、回を重ねるに連れ、記述内容が日本語能力からレポートの内容面への言及へと変化し、最終回ではそれまでと異なり他者や自己のレポートに対する厳しいコメントがなされていたことが分かった。

41. 読み合う活動を取り入れた中級レベルの作文授業

西山友恵・久津間幸子（東海大学）

本発表では、学習者同士で作文を読み合う活動を取り入れた授業について報告する。読み合う活動は、初稿作

成時から複数の読み手を意識しながら書けるようにするために行った。作文は初稿で教師が添削と内容に関するコメントを行い、ワードでリライトしたものを読み合った。読み合いの際には、友達の作文は読んだ後にコメントを書くよう指示した。作文をクラスで読み合うことに関して、学習者は概ね肯定的に捉え、友達の作文を読むこと、教師以外のコメントを得ること楽しんでいたことがわかった。また、本活動を通じて、読み手を意識するようになった、相互理解に繋がり書く動機付けが高まる、学習に繋がると言及するという回答が得られた。

42. 自らの日本語世界を広げる辞書作りを通じた語彙学習の試みー中上級日本語学習者を対象としてー

山田野絵 (筑波大学)

本発表は、留学生自らが、興味ある分野の辞書制作に取り組んだ語彙学習の授業実践報告である。本授業は、交換留学生在が広く日本社会や文化に接しながら日本語を学習することを目的に開設された。そこで、生の日本語に触れ、語彙・表現を豊かにし、自らの日本語世界を拡大することに資する辞書制作を実施した。また、語彙・表現獲得の他にも、辞書という成果物により得られる達成感や、自律学習を促す効果も期待できる。アンケート結果では、「授業満足度」や「自律学習を促す力の向上」が高評価を得た。より高度な産出活動に繋げること等が今後の課題である。

43. メール文の web 自動採点システムの開発ータスク内容の検討ー

金庭久美子 (立教大学)

本研究は、「メール文の web 自動採点システム」を開発することを目指している。金・橋本・金庭(2015)では web 自動採点システムにおいて、内容について容易に判定するためには、タスク達成のための必須語が少ないものの方が自動採点に向くことを明らかにした。本研究ではその結果に基づき、10 のタスクを作成し日本語母語話者と日本語学習者(韓国語母語話者) 10 名ずつの語彙の使用状況を見た。その結果、作成したタスクは、タスクによって多少の差はあるものの、使用された語彙の面から見て日本語母語話者と日本語学習者の間に大きな差はなく一定であり、web 自動採点システムで内容について判定しうるものであることが確認できた。

44. 中国語母語話者を対象とした初級クラスにおける日中同形語指導の試み

游能睿 (早稲田大学大学院生)

中国語を母語とする日本語学習者にとって、母語の知識が日本語の漢字語彙の学習に役立つ一方、学習の妨げになることもある。その原因は日中同形語にある。本研究の目的は、中国語母語の初級学習者を対象とした日中同形語の効果的学習につながる指導法およびその課題を探ることにある。本研究では、台湾の大学で学ぶ 15 名の学習者に対して、日中同形語の体系的指導を行った。指導後、学習者にアンケート調査を実施し、1) 日中同形語の存在に気づいているが、もっと具体的な内容を知りたい、2) 日中同形語の体系的学習が必要だ、3) 新出語に日中同形語の情報があれば、その学習がしやすくなる、という結果が得られた。本発表ではその実践報告を行う。

45. Extensive Reading(多読)による読み手の変化

熊田道子 (東京外国語大学)

日本語中級前半学習者に対する Extensive Reading (以下、ER) の効果を検証するため、読みの最中における読み手の意識変化を調べた。中級前半レベルの読解クラスで、1 学期間 ER を行い、学期の中期と終了期の 2 回に調査を行った。データ分析の結果、中期には「語彙」を対象とした「語り」が中心であった。語彙の意味確認などが多く行われていた。一方、終了期には 1 文以上のまとまりのある部分の「内容」を対象とした「語り」が多く行われていた。終了期には、推測や、自問自答、複段落の内容に対する要約や感想等、「内容」を対象とした「語り」が観察された。

46. 中級漢字圏学習者による「漢語の読みを仕分けるタスク」を観察する (2)ー先行タスクの影響と既知語の利用に着目してー

渡部みなほ・藤田朋世・猪股来未・前原かおる・増田真理子 (東京大学)

豊富な漢字語彙を持ちつつ、それを理解面・発話面では活用できていない漢字圏学習者へのサポートとして、これまで漢字音の学習内容・方法を提案、実践してきた(増田他 2013 ほか)。本発表では、渡部他(2015)に続き、同タスクの後半における学習過程を観察した。この学習活動は、漢語の読みを決定する環境の意識化タスク

で、学習者の気づきを促し、自らが音交替規則を発見できるよう設計されたものであった。しかし、学習過程を録画、観察したところ、学習者には、1)先行するタスクの影響による規則の混同や、2)規則そのものでなく、具体的な既知語の利用が見られた。発表では、これらの観察結果をうけ、開発中のタスクの教育改善の方向性について述べる。

47. アカデミックリテラシー育成を目的とした教材の開発

衣川隆生・田中典子（名古屋大学）・内山喜代成・近藤行人（名古屋大学大学院生）・松尾憲暁（名古屋大学）

名古屋大学では現代社会で話題となっているテーマを題材とした教材を作成した。この教材はそれぞれのテーマに関わるニュースや新聞記事で伝えられる内容について、対話を通して内的説得力のあることばとして解釈する活動を行うことで、留学生に求められるアカデミックリテラシーを育成することを目的としている。本発表では「ブラックバイト」を題材とした教材による中上級日本語学習者を対象とした実践を取り上げ、そこでどのような対話、解釈が生じたかを分析する。分析の結果、ブラックバイトを自分自身の言葉で再定義する活動や、雇用者、被雇用者の立場から労働環境を説明する活動を通して、創造的な解釈が産み出されることが示唆された。

【会場案内】

国際交流基金日本語国際センター

〒330-0074 埼玉県さいたま市浦和区北浦和5-6-36

TEL. 048-834-1180 (代表) <http://www.jpfi.go.jp/j/urawa/about/access.html>



【昼食交流会】

今回も前回に引き続き、研究会終了後の懇親会の代わりに午前のポスター発表終了後、2階口頭発表会場にて昼食交流会を行います。ぜひご参加ください。事前申し込みは不要です。当日受付にてお申し込みください。交流会参加費は1000円です。当日受付にてお支払いください。昼食をとりながら、参加者のみなさんと自由楽しく交流しましょう。

【会費納入のお願い】

JLEM では 4 月から翌年 3 月までを会計年度としております。2015 年度会費 (3,000 円) 未納の方は早急に納入いただきますようお願いいたします。2 年分未納の場合は会員資格を失います。会費は、会場の混雑を避けるためにも、可能な限り、事前に郵便局にて下記の口座に「電信振込」でお振込みください。郵便局に口座を持っている場合、振り込み手数料は無料になります。ご不明な点がおありでしたら、jlem-ml#tiu.ac.jp (#は@でず)まで e-mail にてお問い合わせください。

【振込先】 (1) 郵便局の「電信振込」で払い込む場合

記号：10140 番号：69076511 加入者：日本語教育方法研究会

(2) 銀行から振り込む場合

銀行名：ゆうちょ銀行

店名：〇一八 店 (ゼロイチハチ店) 金融機関コード：9900 店番：018

預金種目：普通 (または貯蓄) ※預金種目は「普通」「貯蓄」のいずれでも振込可能

口座番号：6907651

口座名：日本語教育方法研究会

今回の第 46 回研究会は、特例で 2015 年度第 3 回の研究会となります。したがって、2015 年度会費を既に納入いただいている会員の方は会費の納入は不要になります。会場での会費の納入は基本的に受け付けておりませんので、2015 年度会費未納の方、今回新たに会員になるご予約の方は、事前の会費納入 (上記参照) にご協力ください。また、2016 年度の会費納入に関しても振込にご協力をお願いいたします。